

「樹氷復活県民会議」第2回WT(播種作業)が開催されました

令和6年6月7日(金)に、山形市の蔵王国有林で「樹氷復活県民会議」第2回技術検討ワーキングチームの会合が開催され、オオシラビソの種子の播種(はしゅ=まきつけ)作業を行いました。

「樹氷復活県民会議(以下「会議」)」は、令和5年3月13日に、蔵王連峰の特徴的な植生であるオオシラビソ(別名アオモリトドマツ)林を再生し、ひいては県民の宝である樹氷の景観を復活させることを目的としており、「技術検討」と「情報発信・次世代継承」の2つのワーキングチーム(WT)が設置されています。

今回は技術検討WTであり、オオシラビソ林再生に向けた実践的活動として開催しました。会議が国有林内に用意した圃場に、山形県森林研究研修センターで選別・保存していたオオシラビソの種子2,400粒を、同センターの研究者らの実演・指導のもと、金網で囲った8つの区画に播種しました。

これまでの取組から得られた知見では、播種した種子は、そのままだとネズミなどの小動物の食害を受けることがわかっているため、播種後に金網をかぶせて保護する必要があります。また、発芽した後の稚樹の生育経過を見ると、非常にゆっくりとした成長ではあるものの、順調であれば8年目前後で20センチメートル以上の高さに成長し、いずれ被害跡地への移植が可能になることが期待されます。

報道機関の方も多く参加され、播種作業を体験しておりました。WTメンバーに対し熱心な質問を多数発しており、当日のニュースまたは翌日の紙面で情報を発信していただきました。

たいへん息の長い取組ではありますが、当署としましても引き続き、会議や、他の関係機関等と連携しながら、樹氷をかたちづくるオオシラビソ林の再生に取り組んでまいります。

